

隙あり型か、隙なし型か

阿部公彦

「完璧な小説」と「おもしろい小説」はちがうのか。そもそも「いい小説」とは何だろうか。何年か前に芥川賞をもらったある作品、「これは見事なできばえ」と感心し友人知人に薦めたのだが、「途中でやめちゃった」という感想が多かった。「完璧な小説」には、読者を寄せつけないところもある——「隙」がないから。「いい小説」かどうかはその先の問題か。今月はスペースもあるし、「隙」の有無を取っ掛かりにして読んでみたい。

隙なし路線 「群像」はお得意の特集。岸本佐知子をゲスト編集長にすえた『恋愛小説集』である（老眼のみなさん、「べんあい」ですの）。きつちりルールの明確なゲームだから、当然「隙なし路線」になる。しかし「変なものを書く」と言われて変なものを書くの

か。深堀骨「逆毛のトメ」、木下古栗「天使たちの野合」、小池昌代「男鹿」の三つは徹底的に「見事な作品」で、文章、仕掛け、ギャグとも鋭い切れ味に惚れ惚れするが、脳天からワインオープナーが突き刺さって首チョンパする深堀作品は、楽しみどころが限定的な分、ややマニア向け。「自分は読者としては選ばれていない」と思う人もいるだろう。奇しくも木下作品も首チョンパ系だが、こちらは登場するサラリーマンたちの馬鹿馬鹿しい会話や行動に妙に懐かしい脱力感が伴い、最後の顔面破裂の静けさに不思議な境地に導かれる。「完璧なきまでの脱力」にチャレンジするあたりはさすがチャレンジャー古栗。一番人気は小池作品か。靴と足の関係をめぐるうすら哀しく、ちよつとだけやらしい、そして濃厚に狂った恋愛譚だが、醜い足のシェーフィッターや「皮のものを身につけるの

はやめなさい」と説くお父さんやら出てきて大いに攪乱する。どうやらこの作品は「隙のない完璧さ」から解放される話なのだ。だから靴。とにかく、「空に蹄で傷をつけ、わたしは天空をかけあがる」という一節に至ると感動する。吉田篤弘「梯子の上から世界は何度だって生まれ変わる」は、物語の代わりにエッセンスがある作品。斜めから飛来するような決め科目やイメージが心地良いが、中には入れてもらえない。大きな物語に伴走する陰の幕間物のようにも読める。村田沙耶香「トリプル」は、若者に3Pが流行するという設定。ほんとうのSFになつてしまうとつまらないところだが、性行為の描写で救われている。本谷有希子は、評者は妙に渡長があつてつい褒めすぎてしまうので、不公平だから、この「震の夫」については夫の内側から出てくる「葉盛」の不協和音的なところがいい、

とだけコメントする。安藤モモ子「カウンターミネーション」はこの特集の中では隙の多い作品。とくに前半は小説の言葉と出来事の時間がシンクロしない感じがあつて船酔いしそうになる。最後まで読んで、心ここにあらず的な、疑似翻訳的なきこちなさが持ち味なのか？　と思つたりした。「すばる」の中原文夫「安川さんの教室」は、安川さんの素顔をちらつとお見せしますという趣向。語りの捌きは軽やかだが、さすがになめらかな手つきが見えずで、読者があまりびつくり

かじやありません」というふりをしたがる。気持ちにはわかる。黒川創「吉田泉殿の蓮池」(新潮)は、世代論やら京都論やらが随所に紛れこみ、小説的テンションが高まりすぎないようにブレーキがかかる。典型的「隙あり路線」だ。そんな迂遠な語りの狭間から遠い過去の小物語が漏れ出てくるという展開なのだが、作品の進行に伴い少しずつ蘊蓄にききな臭いものが混じる。この微妙な起伏のコントロールに洗練された手際を感じた。木村友祐「ひのものとまなか」(すばる)は青森から出てきた青年の「出戻り」譚。交際相手の元彼に呼び出されてのこのこ出かける不自然さとか、女たちの描き方がやや典型的といった技法上の「隙」はあるものの、冒頭の喧嘩や「東北至上主義」宣伝カーから岩の模様がずり落ちる場面など印象的で、決してつまい小説ではないのに好感を持つ。「隙」の効用だ。これに対し、坂口恭平「蠅」(新潮)は建築

まで「隙」だらけだと好意的に読むのが難しい。小田雅久に「人生 信憑待ち」(en-taxi)はタイトルの通り、信憑待ちが人生そのものに変貌するという寓話仕立て。前半の饒舌はやや無駄で刈りこむべきだし、そもそもここまでベタなタイトルをつけるのは無防備すぎではないか。谷崎由依「波間」(同)はご本人もわかっていると思うが失敗作。語り手が調子の悪さを演出しているというより、ほんとうに調子が悪そう。後半の逸話を冒頭に持ってきたら何かが変わったかもしれない。

別枠 今月、評者の前に立ちばだかつたのは中原清一郎「カノン」(文藝)。六五〇枚！しかし、驚くほど早く読める。六十近い男性の脳(と精神)を、三十代の女性の肉体に移植する話だが、展開はそれなりに巧妙で、死に向けた切迫感もある。その意味ではよく出ているが、多くの作品とは土俵がちがうとも思つた。とくに脳と身体が対等の関係にあるという中心テーマを、言葉の意味と形(つまり脳と身体)のテンションを通してではなく、完全に脳の言葉で説明的に語るあたりがそれ。ただ、こういうふうに語ってほしい読者もいるでしょう。